

令和4年度 第1回新潟市歴史博物館運営協議会 会議録要旨

【日 時】 令和4年8月2日(火)
14時30分～16時10分

【場 所】 新潟市歴史博物館セミナー室

【出席委員】 池田 哲夫 会長 (新潟大学人文学部名誉教授)
本井 晴信 副会長 (元新潟県立文書館 副館長)
石塚 正朗 委員 (新潟日報社 読者局 事業担当部長)
上村 啓 委員 (BSN新潟放送 事業局次長 兼 事業部長)
久保 有朋 委員 (古町花街の会)
佐藤 宏欣 委員 (新潟市立東石山中学校長)
渋川 綾子 委員 (にいがた湊あねさま倶楽部)
坂内 徹 委員 (新潟市立南浜小学校長)

【オブザーバー】 遠藤 和典 新潟市歴史文化課 課長

【事務局】 坂井 秀弥 新潟市歴史博物館 館長
小林 隆幸 新潟市歴史博物館 副館長
鷺尾 雄二 旧小澤家住宅 館長
高桑 一代 新潟市歴史博物館 総務担当次長
石田 孝子 新潟市歴史博物館 企画普及課長
森 行人 新潟市歴史博物館 学芸課長
設楽 明子 新潟市歴史博物館 職員
高橋 久美 旧小澤家住宅 職員

【 次 第 】

1.開 会

2.館長挨拶 詳細別紙

3.議事

(1) 令和3年度の館運営報告

1) 博物館

2) 旧小澤家住宅

資料1～6に沿って、事務局から説明。

≪質疑応答1≫ 詳細別紙

(2) 令和4年度の館運営状況

1) 博物館

2) 旧小澤家住宅

資料7～13に沿って、事務局から説明。

≪質疑応答2≫ 詳細別紙

4.閉会

《館長挨拶》

(坂井 館長)

当館館長の坂井秀弥でございます。

私はこの4月より館長を務めているが、新潟市沼垂の生まれで2年前に大学を退職し新潟に戻ってきた。ふるさとの歴史・文化に関われるのは大変嬉しいと思う一方で、今まで博物館との関わりは少なかったのではどの程度できるかと少し心配もしている。

年2回開催されるこの運営協議会は、博物館運営について外からの様々なご意見を伺って博物館の適切な運営に役立てる場であり、本日の第1回では令和3年度の事業報告と令和4年度の事業計画等についてご報告させていただく。

文化財や博物館の世界は、数年前に文化財保護法が改正され、活用を重点的に行うべしという考え方が示されている。文化財の世界ではそれに対する戸惑いや拒否反応があるが、多くの人に見ていただいて資料の価値・魅力を知っていただくことは大切。地域社会が大きく変貌していく中で、伝統的なものが失われていく中で歴史や文化財を大切に、正真正銘の正しい歴史に基づいた地域づくりが求められているのではないかと思う。

そういった点で新潟市においてこのみなとびあが果たす役割は大変大きい。その役割をきちんと果たせるように、こういった機会に様々なご意見を伺いながら館のより良い運営に努めてまいりたい。本日は忌憚なき意見を頂きたい。

《質疑応答1》

(久保 委員)

ボランティア関係について、登録者数の報告を受けたが、私の勤めている齋藤家住宅では、辞めるということは無くても、実際に出動する機会がこのコロナ禍を通じて一定期間無かったために、ボランティア数が減少しているような傾向がある。2館においても同様の傾向が見られるか。またそういった傾向の有無に関わらず何か対策を講じているか。

(小林 副館長)

確かに団体のお客様が減っているため、当館のボランティアガイドの活動機会も減っている。当館ではお客様を案内するだけでなく、ボランティア同士が集まって活動するイベントや交流する機会を設けている。バスチャーターして歴史的な場所・史跡を見て回る見学会を開催するなど、活動は縮小しているが続けている。こういったご時勢なので特に不満などは聞こえてこない。

(鷺尾 館長)

コロナで団体客が減っていることもあり、フリーで待機してもらうボランティアガイドは減っている。事前にガイドの要請があった時にのみ依頼して来てもらう状態が続いている。実際に活動しているのは十数人。依頼してもコロナを理由に辞退される場合もある。コロナが収まった時にまた来てもらえるようにしたい。開館から10年を経過して、当初元気だったボランティアさんも高齢化し、毎年数名の方が亡くなられたとのご連絡を頂く。改めて再募集を考えている。

(久保 委員)

収支決算関係についても伺いたい。2館共通していると思うが、消耗品費と修繕費・工事請負費の決算額が予算額に比して大きい。修繕などは突発的に起こるものではあると思うが、こういった理由で支出が大きくなっているのか。

(高桑 次長)

建物も老朽化して、設備の方も突発的な故障・不具合が生じている。予算が限られている中、館の運営に関わるものは最優先で実施したいが、予算に追いつかず、他の費目の予算を削って回している。今年度も既に不具合が出てきているので予算が間に合うか心配なところ。

(鷺尾 館長)

文化事業費と施設管理受託事業費それぞれに消耗品費／消耗什器備品費があるが、どちらで支出するかは比較的緩い部分がある。例えば文化事業費は決算額が予算を超えているが、管理受託事業費は残が生じている。実際に消耗品は色がつけにくく、館内で使用するものが多いが、建物の日々の仕事で使うものについてはどちらに属するか区別がつけにくい。管理上は多少自由にに使わせていただかないと運用が難しいということをご理解いただきたい。

(高桑 次長)

消耗品費については、施設設備の修繕に伴うものが大きい。(空調)フィルター交換などが頻繁に必要であったりしたが、特にこれを買ったから支出が大きくなったという訳ではない。少しずつの積み重ねとご理解いただきたい。

(久保 委員)

突発的なことが起こり他から充填して賄っていると理解できた。予算も限りがある中で苦しいと思うが、来年以降も同じように他から充填できるか、新潟市の方から施設管理のための設備費について、補助が必要になった時にきちんと動いてもらえるか心配している。

(久保 委員)

追加でもう1点。歴史発見プロジェクトで寄付金が少なく、予算で100万円減っている。このご時世で難しいのは理解できるが、今後の活動に制限がかかるなど運営上の課題となると思うので、今後改善の余地というか何か考えがあるか。

(高桑 次長)

歴史発見プロジェクトの寄付協賛については、この2年間コロナ禍の中で、企業団体様も苦しい中でやりくりしていただいていたが、今回は出せないと断られたところもある。

今年度はアフターコロナを見据えて新規に数社開拓した。

来年度以降は対象を企業団体様だけにするのも視野に入れながら、できるだけ資金の獲得に努めたい。

《質疑応答2》

(本井 副会長)

地理的なところで、沼垂地域を取り上げることが度々あるが、決まって阿賀野川と信濃川が合流して、それがどのような地形になったかという江戸時代の図面が中心になることが多かった。ではそれ以後どうなったのか。現代に至る間、特に明治以降近代のあの地域の激変ぶりは日本の国策がどう反映してきたかを如実に示しているにも関わらず私の印象としてはあまり紹介されておらず、地元に対してのアピールが偏りすぎている気がする。近世よりも近代以降、現代に近い地元の変化の記録や図面に個人的に興味がある。みなとぴあはその資料を豊富に持っていると思うので、資料の活用について考えられているのであればそのあたりを意識して紹介するなど、何らかの企画に反映させてもらえる嬉しい。

(小林 副館長)

参考にさせていただきたいが、展覧会で、となると年間の企画展の回数が決まっており、話し合いが必要となる。一方で地元の方からも、その地域でその時代の話をしてほしいというオファーがある。そういった機会にその周辺の話をするのはあったので、持ち帰って検討させていただきたい。

(佐藤委員)

先日当校の生徒が職場体験学習でお世話になった。いい指導をしていただいたようで充実したいい顔で帰ってきた。

むかしのくらし展が今年19回目ということで、開館以来ずっとやっておられると思う。新潟市108校小学校があるが、全部が来ているわけではないと思う。例年やっている中で子どもたちの様子を見て、博物館の方から学校側へこうやったらもっとよくできるという提案があれば教えていただきたい。

(坂内 委員)

同じく学校の現場から付け加えたい。

くらし展は自分も教諭時代に生徒を連れてきて、体験したりお話を聞いたり、大変いい企画展だと思っている。昨年度 ZOOM で授業をしたというお話があったが、今、なかなか来られない状況、また学校は移動交通費が出せない状況で ZOOM を使ってというのはよい試み。当校は去年美術館で ZOOM の授業を行った。事前に美術館の職員が来てくれて説明して、美術館に行って体験するという活動があった。博物館でもそういった活動もされるといいと思う。

(森 学芸課長)

まず ZOOM について、新津の小学校で地域の学習をやったのだが、地域の資料は意外に知られていないこともあり、資料をオンラインで紹介しながら ZOOM でお話をさせてもらった。むかしの地図を実物であれプロジェクターであれたくさんの人に一度に見てもらうのではなく、子ども1人1人に身近に見てもらうことができ、学校の先生にも喜んでいただいたし、ZOOM で行うというのは資料をよく見ってもらう点でも可能性があったという実感があった。

学校側への提案について、昨年度、運協の委員を務めていただいた先生と市小研の有志の先生に協力いただき、ZOOM (などビデオ会議) ではないが WEB で学校向けに発信する新しいコンテンツ作りに取り組んでいる。また、コロナ禍で学校からお出でいただくのが難しいのとカリキュラムが今年大きく変わって、むかしのくらし展の開催時期と小学校3・4年生の単元のタイミングがず

れてきている。そこでこちらから民具を持っていく、または貸し出しをして活用する、そのツールを整えるということに取り組んでいる。

(本井 委員)

毎年新しい収蔵品が入ってくる。点数や個々の紹介の筋道は展覧会の中ではつけにくいと思うが、いかにすごいものが手に入ったか、いい寄贈があった、よくぞ残しててくれたという感動が伝わってこないことを残念に感じている。もっとパフォーマンスをしてほしい。どういうものが役に立つか、博物館はどういうものが喜ばれるか知らない人の方が多いので、生活の中での発見を考えると、そこはもっと過度にやらないと伝わらない。あまりにも淡々とやるからいつ始まっていつ終わったか、どんな特徴的なものであったのか、広報のイメージが全然ない。物語を作るなど何でもいいので強調して喜びを表現してほしい。

(小林 副館長)

なるべく素直な喜びを表現するように収蔵品展を開催していきたい。

(森 学芸課長)

最近の収蔵品展・新収蔵品展に関するご指摘だと思うが、少し前には活動展示で、こういう資料を貰って資料の見所はどこでといったことを共有するワークショップを開催していた。資料と一緒に参加者に入って貰い、人を介して資料の魅力を引き出すように取り組んだ数年があった。資料の面白さや場を共有することで花開いていく実感があり、期間中に各担当でワークショップを毎週末開催していた。そういったスタイルが可能性のひとつとしてあるが、今は人が入ることで密になり資料について語るようなスタイルが難しい現状もある。

過去の事例としてご紹介させていただいた。

(小林 副館長)

コロナ禍において他館からの資料借用が出来ずに行ったのが「いっぴん」展。当館の資料でここが面白い、というのを各学芸員が紹介する企画を1回やった実績があるので今後の収蔵品展・新収蔵品展に生かしたい。実際にお宅から貰ってくるのは担当学芸員なので、その担当学芸員が、どこが面白いのかをピアーアールしていくのがいいのかと思う。それがいっぴん展をやった感じたところ。今後ご意見を参考にしながらやっていきたい。

(佐藤 委員)

学校教育でもよく言われているのが、授業のやり方を考えていかなければいけないということ。昔の授業は順を追っての説明だったが、最近は逆説的に伝えていく。そこから色々な疑問が出て学びが出てくる、新たな発見が出てくる。やり方を変えると色々な学びや色々な動きが出てくると思う。展示はキャプションがあって読んで理解してねというところがある。そういったところが工夫できるともう少し学校教育との結びつき、社会教育との結びつき、博物館とのつながりが出てくると思う。

(小林 副館長)

学校側がどのようなことを博物館に求めているかを踏まえて、昨年、市小研の方たちと会合の場を設けて、お互いにどういうことができるかを理解しあうようにした。今後も継続する予定。先生方は短い時間の中で見学に来て、我々に内容を預ける。時間内で何とか紹介しないといけなくなってしまう。

(佐藤 委員)

実際のところ学校の先生方は何をやっていいか分からない。博物館の方からある程度テーマを立ててもらって、例えばこういうことができる、これをやるとこんな学びができる、などアピールしていくのもやり方の一つ。

(小林 副館長)

今回、佐藤先生・坂内先生とのつながりもできたので意見交換していきたい。これからもぜひアドバイスを頂きたい。

(上村 委員)

自主事業の説明の中でハワイアンキルト展中止になったと説明があったが、当社も貸館で利用の際、新潟市にまつわるもの、歴史にまつわるものに限ると説明があった。ハワイアンキルトが新潟市と歴史に結びつかないのだが、利用用途が変わったのか。

(小林 副館長)

新潟市とハワイとのつながりだとか、歴史の要素を絡めるようお願いした。設定は変わってない。

(上村 委員)

中身の展示などで工夫するということですね。

(久保 委員)

旧小澤家住宅へ意見。令和2年度以降、旧小澤家住宅周辺地区が景観特別区域になり、時を同じくして周り的高須さん（宿泊施設 OTONARI）や片桐さん（片桐寅吉商店）も登録文化財になり、景観的、文化的な価値が明確に打ち出されてきた。片桐さんのレストランも人気が出ているし、向かいの小澤さんも週1回程度の飲食店をやられたり、宿泊施設もできて文化的・景観的な価値だけでなく、観光的な機能が非常に充実してきたと感じる。今後、住民団体の考える会と連携して文化財的なものに着目した展示をされていくと、エリアとして価値が上がっていくのが来館者にもより伝わりやすいのではないかと。

(鷺尾 館長)

令和2年の11月に歴史的景観特別区域に指定されて、通り全体の歴史的景観を維持していこうという考え方が示された。片桐さんや高須さんのところと連携して何かやっていくことは今後できるかなと思っている。『旧小澤家住宅周辺の歴史的町並みを考える会』に今言った方がメンバーに入っており、毎月1回役員会を開いて、その中で今のような話は上ってくるのでこの会中心にやっていく。今はまだ具体的に新しい展示は決まっていないが、歴史的地区として景観をよりよくするための電柱の地中化の検討などはやっており、そういう取り組みを通じて少しずつ良くしていきたいという気持ちはある。そうは言っても（歴史好きな方だけでなく）色々なお客様に来てほしいという思いがあるので、片桐さんの食堂や小澤家本家のレストラン分店の出店などは賑やかさという点で、色々な方に来て見ていただけるし、食べものや物販でお客さんを引き寄せて関心を持ってもらうのは大事だと思う。当館がコロナ禍で始めたおやつの日などのイベントは悪くないなと思っている。またすぐとなり本町通り商店街で、やる気のある方も居るので、そういったところともタイアップしながらこの地域を盛り上げる仲間として協力しながらやっていきたい。

(久保 委員)

鷺尾館長の言葉から思いは伝わってくる。旧小澤家住宅はまちなかの文化施設として、地域との交流連携の理想的な形だと思っている。これからもその動きが進展していくことを願っている。

(遠藤 課長)

最後にオブザーバーの立場で一言発言させていただく。先ほど教員のお二方より学びの変化、学校教育と社会教育の観点から貴重なご意見を頂戴した。新潟市の立場で言うと、学校現場では通信機器が大きく変わり、学びの変化がある。教員の多忙化という社会的な問題があり、部活動の地域移行など大きな教育環境の変化があるのが現状と認識している。子どもたちへの教育は未来への投資という大事な側面。

新潟市では来年度からの新しい総合計画を作っており、その中で文化スポーツ部においては教育、子どもの分野が大きなテーマ。今の新潟市の総合計画「にいがた未来ビジョン」はどちらかというと横断的であり、行政には分かりにくい部分もあった。新しい総合計画では SDGs の観点、全般的に文化と観光の融合が重要である。新潟市歴史博物館について言えば、本日の内容にはなかったが、今ホームページのリニューアルをお願いしている。観光の分野では、修学旅行は今まで新潟県にお越しいただくことがあまりなかったが、今、山形・福島からのツアーが多い。令和2年度は GOTO キャンペーンで博物館の来館者が伸びた時期があった。児童を対象とした取り組みは今後も重要になってくる。市内のお子さんを対象とする取り組みも重要だが、それが派生して他の地域の子どもたちを受け入れることにも繋がる。

みなとびあの立場からは、学校の先生方にも色々な機会を通じてご理解と認識をいただく機会も大事であるし、なるべく効率的、効果的に児童に到達できる仕組みを我々も一緒に考えていきたい。今後ともご指導いただきたい。

以上